

漢語近世音のはなし---(6) 尖音と団音

中村雅之

§ 20、尖団の区別

後期近世音の重要なトピックの一つに「尖団の合流」(または尖団の合一)というものがある。これはピンインの「j」「q」「x」で表記される音が、明代以前には二系列の異なる音声であったのが、清代中期以降にその区別を失って合流したものである。その二系列のうち一方を「尖音」、他方を「団音」という。伝統的な韻図の枠組みで言えば、「尖音」が「齒音」、そして「団音」が「牙喉音」に相当する。具体例を見てみよう。

例字	明代	清代後期
尖音「将」	[tsian]	[tɕian]
団音「江」	[kian]	
尖音「青」	[ts'iq]	[tɕ'iq]
団音「輕」	[k'iq]	
尖音「西」	[si]	[ci]
団音「希」	[hi]	

日本漢字音(=音読み)で読めば、尖音が「サ行」「ザ行」、そして団音が「カ行」「ガ行」であるから、日本人には尖音と団音の識別は容易である。

はたして尖団の区別が失われたのはいつか、これが近世音研究においてしばしば取り上げられるテーマであった。しかしこの問題設定それ自体がやや曖昧な部分を含んでいる。特に注意すべき点は、このテーマの対象を北京音に限らなければならないということである。明清代の雑多な資料を整理せずに利用するならば、尖団の問題は必要以上に複雑になる。南京官話においては、19世紀初頭まで尖音と団音はそれぞれ/tsi-, ts'i-, si-/と/ki-, k'i-, hi-/とで明瞭に区別されていた。また、20世紀になっても尖音/tsi-, ts'i-, si-/、団音/tɕi-, tɕ'i-, ci/として区別されており(現代の南京音は老年層を除き北京語と同様の状況)、北京語とは様相が異なっている。官話の資料と北京語の資料を混同しないことが重要である。

また、尖団の区別の消失という場合、ある一部の人々に尖団の混同が生じた時点を言うのか、それとも北京語のほとんど全ての話者が尖団の区別を失った段階を言うのかということが問題になる。実際にはこの二つを区別するのは容易ではないが、少なくともある個人の随筆など、断片的な資料によって体系全体を論じるのは適当ではある

まい。加えて、牙喉音の舌面音化([ki-] > [tci-] など)と、尖団の区別の消失とが、資料の上で区別が付きにくいことが挙げられる。例えば、京劇におけるような尖音[tɕi-]と団音[tci-]の対立は、満洲文字やハングルによる表記では厳密に区別する方法がないのである(一様に「ji-」のように表記されることになる)。

§ 21、牙音の舌面音化

花登正宏(1991)²³には牙音の舌面音化に関わる資料が列挙されており、参考になる。それらを見渡すと、17世紀の北京において多くの役人が団音を[tci-, tɕ'i-, ci-]と発音していたことは、おそらく間違いないと言えそうである。とりわけ永島栄一郎氏によって紹介された1662年の官印「琉球国王之印」において、「琉球」を満洲文字「lio cio」で表記している点は重要である。公に認可された印において団音の「球」が「cio」(この表記は音声としては[tɕ'iu]を意図している)と表記されているわけであるから、個人の観察による随筆類とは次元が異なる。さらに山崎雅人(1990)²⁴も、ヌルハチの満文実録の中から、「監軍道」を満洲文字で「jiyan jiyūn doo」と記すなどの例を追加している(「監」「軍」ともに団音)。

このように、17世紀には牙喉音の舌面音化がかなり広まっていたと考えられるが、上述のように、そのことは必ずしも尖団の区別の消失(すなわち尖団の合一)を意味しない。具体的に言えば、尖音と団音は合流してともに/tci-, tɕ'i-, ci-/になっていたかも知れないし、尖音/tɕi-, tɕ'i-, si-/、団音/tci-, tɕ'i-, ci-/という形で区別されていたかも知れないのである。これに関連して興味深いことは、清代中期以降の満洲文字資料では、漢語音表記における尖団の区別が原則として明瞭に保たれているということである。例えば、「清文啓蒙」は「cing wen ki meng」と表記され、尖音「清」と団音「啓」は満洲文字「c」と「k」で区別されている。これをどう理解すべきであろうか。

§ 22、尖団の合流

まず確認しておかなければならないことは、北京語においては、18世紀前半までには尖音と団音が合流して全く同音になっていたということである。このことは尖音団音の双方で満洲文字表記「j/c/s」と「g/k/h」を混同する『満漢字清文啓蒙(1730)』や『兼

23 cf. 花登正宏(1991)「牙音の舌面音化について」『集刊東洋学』65.

24 cf. 山崎雅人(1990)『大清太祖武皇帝実録』の借用語表記から見た漢語の牙音・喉音の舌面音化について』『言語研究』98.

満漢語満洲套話清文啓蒙(1761)』などの資料によって知られる²⁵。つまり、北京語における団音の舌面音化は17世紀にはすでに生じており、また遅くとも18世紀前半には尖音も舌面音化して、尖団の合流は完成していた。16世紀の北京語は南京官話と同様に尖団を明瞭に区別していたにもかかわらず、18世紀の北京語は尖団に関して南京官話とは全く異なる様相を見せていたことになる。

§ 23、満洲文字表記の性格

『満漢字清文啓蒙』(1730)などによって、18世紀前半にはすでに尖団の合流が完了していたことが確認できるにもかかわらず、『増訂清文鑑』(1771)など公式の満洲文字資料の表記では変化に逆行したかに見える表記、すなわち尖音「j/c/s」、団音「g/k/h」が用いられる。このことについて、山崎(1990)は、「後の満洲語文献では、漢語の「正音」に倣って尖団を書き分けるという人為的操作をしたため、古い文献の方が新しい変化を記すことになっている」と解釈した。

これに対して、岸田文隆(1994)²⁶は異なる角度からの解釈を提示している。規範意識という観点に加えて、表記者の音韻体系をも考慮すべきだという。具体的には、

……清初の表記者は満洲語の音韻体系で漢字の発音を聞き表記したために、舌面音化した団音字に対し尖音字にあてるのと同じji,ciなどの表記をあてたのである。しかし、清代も中ごろになると漢化の程度も深まり、表記者の音韻体系は漢語の音韻体系にかわった。そこで、清初には聞きわけられなかった舌面音化した団音字と尖音字の区別をなしうるようになり、異なった満洲字(団音字にはg,k、尖音字にはj,c)をそれぞれにあてるようになったのである。

という。岸田氏の解釈では、清代中期においても尖団の区別はなされていたということになる。岸田(1994)が主に用いたのは『清書千字文(1685)』と『満漢千字文』(康熙年間)で、これらの資料では、ほぼ尖団が「j/c/s」と「g/k/h」で区別されていることから、上のような解釈に至ったと思われる。

エドキンズ(Joseph Edkins)以前の西欧宣教師によるローマ字資料において、尖団の区別が明瞭に保たれているのは、そこに記されたのが北京語ではなく、(広義の)南京官話であったことによる。山崎(1990)は、初期の満洲文字資料と同時期の『西儒耳

25 cf. 落合守和(1989)「翻字翻刻兼満漢語満洲套話清文啓蒙」(乾隆26年、東洋文庫蔵)『言語文化接触に関する研究』1.

26 cf. 岸田文隆(1994)「満洲字による漢字音表記の規範化—満洲字千字文を資料として—」『言語学研究』13.

目資』(1626)に団音の舌面音化が全く示されないことについて、これを韻書の規範性によるものと見なした。だがむしろ、このローマ字資料が南京官話を記したために、尖音と団音を発音どおり明瞭に区別したと考えるのが妥当である。

南京官話が清代中期まで大きな影響力を持っていたことは高田時雄(1997)²⁷に詳しいが、そのような状況を考慮に入れるならば、満洲文字資料における尖団の表記においても、南京官話の影響について検討してみることが必要になる。

17～18世紀の北京音と南京官話音の主な違いは、(1)南京官話に声門閉鎖音を伴う入声(例えば「略/lioʔ/」)があること【この点は満洲文字資料には反映しない】、(2)北京音では旧入声韻に南京官話音によく似た文言音(「略/lio/」)のほかに伝統的な白話音(「略/liau/」)があること、(3)果撰1等牙喉音開口(「歌」「可」「河」など)の韻母が、北京では非円唇[ɤ]であるが、南京官話では[o]であること、そして(4)南京官話では尖団の区別が明瞭([ts/ts'/s]対[k/k'/h])であること、以上である。したがって、(a)白話音が多く記される、(b)果撰1等に非円唇の韻母が記される、(c)尖団の区別の乱れが確認できる、のいずれかの条件が満たされれば、自動的にその資料は北京音を表記したものと判断される。逆に、そのような特徴が一切ないものは、南京官話を表記したか、もしくは北京音に依ったとしても南京官話を参考にした可能性が高いということになる。

『大清太祖武皇帝実録』(1636)、『滿漢字清文啓蒙』(1730)、『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』(1761)など確実に北京音(または周辺の北方音)を記したと認められる資料のみを追ってみると、17世紀前半には団音がすでに舌面音化しており、18世紀前半までには尖団の合流が完了していたことはほぼ疑いない。そのような変化に逆行するように「j/c/s」と「g/k/h」で尖団を明瞭に区別する『清書千字文(1685)』や『増訂清文鑑(1771)』は、何らかの形で南京官話の影響を受けている可能性がある。もしこれらを純粹の北京音資料と見なすとすれば、岸田(1994)が考えたように、団音[tei-, te'i-, ei-]を満洲文字「g/k/h」で表記することによって、尖音[tsi-/ts'i-/si-]との区別を図ったということになるが、その想定は、17世紀の『清書千字文』や『滿漢千字文』には成立しうるとしても、すでに尖団の合流が完了していた18世紀後半の『増訂清文鑑』には成立しにくい。

『増訂清文鑑』では「歌」「可」の韻母が「e」で記されるから、一応は北京語の資料ということになるが、入声字に白話音が用いられないことと、尖団が「j/c/s」と「g/k/h」で区別されることについては、南京官話の音形を参照したと考える方が無理がない。つ

27 cf. 高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』。

まり、山崎(1990)が「後の満洲語文献では、漢語の「正音」に倣って尖団を書き分け」と解釈したその「正音」を、南京官話音と見なす訳である。北京を牙城とした満洲人の文字である満洲文字と、南京の言語を代表とする南京官話の組み合わせは、一見 mismatch のように思われる。しかし、満洲文字による漢語表記では、むしろあまりにも北京的な発音は卑俗なものとして避けられているようである。例えば、満洲語と北京語の対訳会話書である『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙(1761)』においてさえ、「没mei」「還hai」などの北京的な発音は避けられ、「没mu」「還huwan」と南京官話風の音が記されている。会話書でさえこのような状況であるから、役所で作られるような公の書物においては、尖音団音の表記に南京官話音が用いられることも十分にあり得たと考えられるのである。

半世紀前に藤堂明保氏は「ki-とtsi-の混同は18世紀に始まる」と論じた²⁸。現在の知見から言えば、「ki-とtsi-の混同」はより厳密には「tei-とtsi-の混同」ということになる。17世紀において表面化した団音の舌面音化(ki->tei- など)は、18世紀には尖団の合流という劇的な変化として表れる。このように満洲文字資料から確認できる尖団の状況は、藤堂氏の推測よりも数十年ほど遡ることになるが、結論としては大きくは隔たっていない。しかし、藤堂氏の時代には北京語と南京官話との違いについては十分な考慮が払われなかった。現代の近世音研究においては、北京語と南京官話との対立(および相互の影響)こそが常に意識すべき重要な視点である。

28 cf. 藤堂明保(1960)「ki-とtsi-の混同は18世紀に始まる」『中国語学』94.